

## 第 27 回ドイツ語教授法ゼミナール報告 (S. Ushiyama) [J]

第 27 回ドイツ語教授法ゼミナールは、2023 年 3 月 15 日から 17 日の 3 日間、多摩永山情報教育センター（東京都多摩市）にて開催された。

今回の教授法ゼミナールでは、パーダーボーン大学（Universität Paderborn）から Sandra Ballweg 教授（以下「Prof. Ballweg」と称する）を招待講師として招いた。Prof. Ballweg は過去に Bielefeld, Kassel, Darmstadt, Marburg 大学にて教鞭をとられた。ライティング支援、ポートフォリオ活動、形成的評価などを専門とし、それらに関する研究と教員養成・研修にも取り組まれている。また、スイス・ティチーノ州の州試験では、アドバイザーとしても従事されている。

ゼミナールのテーマおよび参加者は以下の通りである。

**総合テーマ：**「テキストを評価する —ドイツ語の授業におけるライティング活動の成果物の扱いを考える—」（Texte beurteilen – Überlegungen zum Umgang mit Schreibprodukten im DaF-Unterricht）

**参加者：**\*Elvira Bachmaier（麗澤大学）, Diana Beier-Taguchi（東京外国語大学）, \*\*Olga Czyzak（中央大学）, 堀口順子（九州大学）, Nina Kanematsu（上智大学）, Axel Karpenstein（DAAD Tokyo）, 小池駿（早稲田大学高等学院）, Eva Koizumi-Reithofer（東京学芸大学）, 草本晶（麗澤大学）, Heiko Lang（立教大学）, \*村元麻衣<sup>1</sup>（名古屋大学）, 中川慎二（関西学院大学）, 那須妙子（Nasu Koichi Kunstraum）, 太田達也（南山大学）, Oliver Phan-Müller（Goethe-Institut）, Markus Rude（筑波大学）, 齋藤正樹（早稲田大学）, \*坂本真一（立教大学）, Gabriela Maria Schmidt（日本大学）, Holger Schütterle（麗澤大学）, Christian Steger（獨協大学）, 鈴木友美加（名古屋大学・院生）, \*武井佑介（麗澤大学）, 牛山さおり（立教大学）, Bertlinde Vögel（大阪大学）, \*Carsten Waychert（京都産業大学）, \*Nancy Yanagita（上智大学）（アルファベット順, \*\*実行委員長, \*実行委員）

### 第 27 回ドイツ語教授法ゼミナールプログラム

	15.03	16.03	17.03
Vormittag		Workshop 1	Workshop 3 Abschlussreflexion
		Vortrag 2	

<sup>1</sup> ゼミ当日は不参加だったが、実行委員のため氏名を記載する。

Nachmittag	Anreise	Workshop 2	Abreise
	Einstieg	Forschungscafé	
Abend	Vortrag 1	Vortrag 3	
	Forschungsaustausch	Austausch und fachliche Vernetzung	

## 1. 招待講師による講演およびワークショップ

Prof.Ballweg による講演とワークショップは、3日間で計3回ずつ行われた。講演は「ライティングのプロセス」「成果物としてのテキスト」「テキストの評価」を総合的なキーワードとし、毎回異なるテーマ（Schreibprozesse und Schreibprodukte, Digitale und analoge Textproduktion und Bewertungsmöglichkeiten, Peer-Feedback, Schreib-konferenzen und Portfolioarbeit）で進められた。ワークショップは、すべて前日の講演と対をなしている。

ゼミナールはテキストを書く能力、成果物としてのテキストに対するフィードバック、評価におけるさまざまなアプローチを中心に進められた。とりわけアプローチについては形成的評価、協働学習におけるライティング活動である Schreibkonferenz、ポートフォリオ、ピア・フィードバックの活動などが含まれ、これらを考察、議論することが、この DaF ゼミナール全体の主旨である。

### 【講演 1】

初日午後に行われた講演 „Schreibprozesse und Schreibprodukte : Zum Umgang mit Texten“では、最初にテキストについて考える時間が設けられた。そしてテキスト能力には自分の意図を適切に伝える文を書く力、テキストから抽出した情報を活用する力などが含まれることが説明され、テキストを誰か他者に向けて書くのか、自分自身に向けて書くのかといった機能面にも着目した。そしてライティング能力には、テキストを作成する能力のみならず、計画性や処理能力、学習あるいはライティングのストラテジーなどが複合的に関連付けられることが紹介された。

講演中には、参加者自身が今までに受けてきたライティングの経験を振り返る時間、さらに自分がどのような書き手のタイプなのかなどを考える時間が設けられた。学習者のライティング活動をより理解するためにも、私たち自身のライティング経験などについて振り返ることはとても有益であった。同時に、今の時代に即したライティング指導に必要なことを考えるきっかけとなった。

### 【ワークショップ 1】

ワークショップ 1 は講演 1 の内容に関連し、„Bewerten und beurteilen“というタイトルで、テキストの評価に焦点を当て、文法の正確性、語彙の豊富さ、内容などをどのように評価しているのか、良い書き手とは何かといったテーマが取り上げられた。実際に学生が書いたテキストをもとに、いくつかの基準を用いながら、テキストをどのように修正できるか、評価できるかをグループワークで話し合った。そして修正提案をどのように学生に伝えるのかという点については、それぞれの学生の段階に応じた評価基準の必要性なども含めて検討することができた。

教員には学習者のパフォーマンスを観察、分析、評価する能力に加え、学習者のモチベーションを高める力、評価を適切に言語化する能力などが求められることが示された。

### 【講演 2】

2 日目午前の講演では、„Digitale und analoge Text – Produktion und Bewertung“というテーマが取り上げられた。近年ライティングを取り巻く環境と媒体は多様化し、ライティング能力はマルチリテラシーになりつつある。私たちがコミュニケーションの手段、テキストの種類が多様化していることを認識し、社会的実践としてのリテラシーという側面を授業に取り入れるためには何が必要なのかを検討した。

この講演では、例えば授業に協働的ライティング (Kollaboratives Schreiben) を導入することが提案された。協働的ライティングでは GoogleDocs、ZUMpad、Cryptpad などを使用することによって、学習者も時間や空間に縛られることなくテキストを書くことが可能となる。この技術の導入は、学習者のメディア能力を向上させ、ペアあるいはチームで協働の能力を育成することにもつながることが説明された。

そしてデジタル空間におけるライティングに関して、人工知能などどのように向き合い、それらをどのように活用するのかという点について、グループで話す時間が設けられた。

### 【ワークショップ 2】

このワークショップは講演 2 の内容と関連し „Schreiben und Bewerten im digitalen Raum“ というテーマのもと、これからのライティング指導を考えることを目標に行われた。同じ文章を ChatGPT、mind-verse、DeepL などにかけて、どのような違いが生まれるのかをグループで確認し、実際に ChatGPT を使ってテキストを書くなどの課題に取り組んだ。非常に短時間でテキストが生成される様子を体験し、出来上がったテキストの問題点がどこにあるのかなどを、グループ内で議論した。

その後、上記のようなデジタルツールが外国語授業にどのような変化をもたらすのかについて、意見やコメントを Moodle のフォーラムに投稿し、授業での学習目標やアクティ

ビティにどのようにデジタルツールを活かしていくかを自由にディスカッションし、アイデアを共有した。

### 【講演 3】

2日目午後の講演は、**„Peer-Feedback, Schreibkonferenzen & Portfolioarbeit: Textarbeit und formative Evaluation“** というタイトルで行われた。教員が学生の理解度を頻繁にかつ相互に評価する形成的評価では、その過程で収集した情報を実際の授業に反映させることで、学生のパフォーマンス、学習意欲などを向上させることができることが示された。

教師から学生へのフィードバックとは異なり、学生同士などでおこなうピア・フィードバックでは、読者の視点を予測しやすく、修正などへの心理的負担が軽くなるという側面も紹介された。ピア・フィードバックをグループで行う活動として、**Schreibkonferenz** が紹介された。さらに学習者の成果を収集し、進歩や成果を示すポートフォリオ活動では、学習プロセスを振り返ることもでき、自己評価と外部評価を満たすものであることにも言及された。学習者が今までの学習を内省することは、自らが学びから得たことを分析し、将来の学習を計画することにもつながることが示された。

### 【ワークショップ 3】

3日目午前のワークショップは、講演 3 と関連付けて、**„Möglichkeiten der formative Evaluation“** として実施された。デジタル化や多言語化が進む時代に、自分の授業で活かせることなどを検討するために、グループによる自由なディスカッションおよび振り返りが行われた。

## 2. 参加者による発表

2日目午後には **Forschungscafé** として参加者による研究発表が行われた。発表のタイトルは以下のとおりである。

- Elvira Bachmaier, Diana Beier-Taguchi, Nina Kanematsu, Christian Steger:  
Schulentwicklungsprojekt „Deutschförderung Plus“ – Kriterien zur Beurteilung der Schreibkompetenz von (mehrsprachigen) Schüler:innen
- Heiko Lang: Texte gemeinsam und fair beurteilen: Ein Praxisbericht
- Taeko Nasu: „Dialogue journal“ und dessen digitale Variation
- Nancy Yanagita: Formative Beurteilung im DaF-Anfänger:innenunterricht: Potenziale, Grenzen, Schwierigkeiten

### 3. 総括

第 27 回ドイツ語教授法ゼミナールは対面での形式で再開され、Prof. Ballweg の温かいお人柄もあり、非常に和やかな雰囲気の中、国籍や専門にかかわらず、活発な発言や議論がみられた。Prof. Ballweg による講演とワークショップを通して、参加者は自らの経験を振り返ると同時に、ChatGPT などのツールを試してみるなどの体験を通して熟考、議論する時間が多く設けられた。授業におけるライティングに関して、成果物の評価、協働的な活動、AI との付き合い方などさまざまな観点から検討を重ねることができたのは、大変有意義な時間であった。このゼミナールで得た知識や経験は、今後のよりよい授業運営につながると確信している。

なお、ゼミナールの実施にあたっては、例年同様、日本独文学会、Goethe-Institut から多大な支援をいただいた。この場を借りて改めてお礼を申し上げたい。

牛山 さおり（立教大学）

0193

作成日 : 2023/06/20